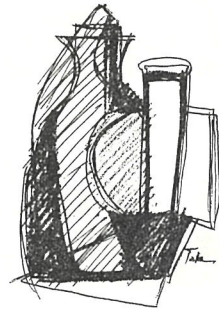


## 随 想



### 『サンドイッチ大学』

— 開かれた大学のために —

近 藤 公 一

旧制の大学に育ったわれわれには、最初、どうも大学における父兄会というものの存在理由がよくわからず、これもわが国私立大学の特殊性のあらわれかと思っていたが、熱心な父兄方と接するうちに、父兄自身がそこで何かを学ぼうとしておられる姿勢に気がつくようになってきた。子供たちのことが契機となっていてには違いないが、それを通じて親も勉強しようとしてい

るのだ。——これはきわめて具体的に、開かれた大学というものの一つの可能性、必然性を示すものである。

大学改革の問題が起って既に久しく、無数の改革案が提示されてきたのに、実際にはなかなか実行されないという事情は、ドイツも日本と大同小異であった。この両国の課題はいろいろな点で驚くほど一致している。だが昨年むこうでみつけた一冊の書物は、とても興味ある提案をしている。それはイェンス・リッテンという人の『サンドイッチ大学——または、万人のための大学』Jens Litten: *Die Sandwich-Universität oder die Hochschule für Jedermann*. Hoffmann und Campe, 1971. というのだが、何だか「駅弁大学」のようで軽薄な感じかもしれないけれど、これはそういうものではなく、とても真面目な大学論である。要するに、大学での勉強と、実社会の仕事とを平行させ、これを交互にくり返すことを提唱した、いわば「学習と労働のサンドイッチ」なのだ。——だが、この勉強と仕事のパターンは、既にドイツでは広く実行されている。私は、滞独

中、どんな町へ行っても Volkshochschule ——市民大学。人民大学とも訳せる——の普及、充実に驚き、その履習要項もいくつ

か買いかめてきたが、これはもう完全に総合大学の規模と内容をもっている。そこへ労働時間の短縮された市民たちが、老若を問わずどっと押しよせて勉強しているのだ。リッテンの提言は、この型を本格的な大学改革の基礎にすえたものである。従来大学の伝統的形態にとられすぎていた。だから破産したのだとかれは言う。……閉ざされたといわれるドイツの大学だが、しかし私は、門や塀のある大学というものをドイツでは見たことがなく。

開かれた大学のために、まず同志社大学は率先して大学の門と塀をとり払ってはどうだろう。——私には、シラーの戯曲『ウイリアム・テル』のある台詞が思い出される。

——あんなものは、これまでウーリイ州にはみあたらなかった。皆もろうやも立ってはいなかった。困い、を、した場所といえ、せいせい墓地くらいなものでした。

——うまいこといわれる。自由を葬る墓ですよ、あの城は。(傍点引用者)

まさに、教育の理念は百年の計である。

同志社の校章には既にいろいろな意味づけがなされているけれど、「働き、学び、生きる」という開かれた大学の新しい三位一体説がつけ加えられることをぼくは夢みている。(大学経済学部教授・独語)

## イギリスの

### 古い教会を訪ねて

#### 大場 啓 蔵

私は一ケ年のイギリス留学中、休みを利用してあちこちに点在する古い教会や修道院のあとをたずねて歩きました。一口に「古い」といってもばくぜんとしておりますが、この場合、六百年くらい前、すなわちチョウサーの時代にでき上がったものという意味しません。私の場合は、専門とかかわりのある七世紀から十一世紀、すなわちノルマン征服までに完成した教会か修道院でその後外部からの影響で破壊されずに一部

または大部分残ったものを意味します。

今年の三月末、ニューキャスル(地名)

を中心にアングロサクソン人たちの教会や修道院のあとを見て歩きました。最初にたずねたのは、ジャロウという所にあるビードが「英国教会史」をラテン語で書いたといわれる修道院でした。周囲は日本の川崎か尼崎のように公害のひどい所にぼつぷりと廃墟がありました。まだ間取りや窓、入口の一部がはっきりわかるように保存されており、七世紀から八世紀にかけて、ドイツ人の侵入までここでは六百人ぐらいの修道僧たちがいましたが、彼らは何を考え、どんな生活をしたのだろうかと色々考えてみました。ビードの「教会史」の八世紀の写本がケンブリッジとレニングラードに一部ずつ残っておりますが、牛飼いのキャドモンが夢の中で神から教えてもらった詩が、これら二つの写本に初期の英語で書かれてあります。これは現存する英文学作品

の中で最古のもので、土地の地方史にくらいしい人に聞いたところでは、聖カスパートもビード先生も世俗の女性はすぎでなかったという。ひたすらに神のみを愛したの

だろうか。イギリスの男性は七世紀から女性ぎらいの傾向があったのだろうか。

ニューキャスルからバスで一時間半ぐらいの所にヘクサムがあり、ここの教会の一部分は七世紀のもので、当時の多くの教会や修道院は木造でかやぶきであったといわれておりますが、石造りの教会は豪華なもので、ローマ人の城壁や神殿を利用して建てたと考えられています。

ケンブリッジ市内にも約千年の間そこで神をたたえ、神に祈ってきたといわれる聖ベネット教会があります。この教会も、塔だけが十一世紀始めのもですが、毎日のようにこのサクスタワーを眺め、当時の説教集を読み、千年の昔の人々とまぼろしの対話するのが楽しみでした。この教会はコーバスクリステイ学寮のもので、ひよっとしたらチョウサーが見たことがあるかも知れないし、マロウがいくどとなく神に祈り、讚美したに違いないゆいしよある神の家です。

アングロサクソン時代の教会は、ふつうの人にはちょっと気付きにくいですが、イギリス国内にかなりたくさんあります。オ

クスフォードでは聖ミカエル教会の塔がそうですし、その他アールズバートン、ブリックスワース、コルチェスター、ボシヤムなど数えきれないほど私はたずねて歩きまわした。プレマーのサクスン教会の内部の石に、ルーン文字とサクスン文字で「ここで神の勧告のことが汝らに啓示される」と書き添えてありました。

(女子大学助教授・英語、英文学)

## 犬

### 中 皓

私の家の回りにはいつも犬が三つも四つも集って来ている。中には棄てられた小さいのが、その儘育ったのも居る。

ある朝早く、自動車静かにやって来た。無心に見ていると、白い物が扉の間から零れ落ちた。可愛い小犬である。自動車は急に走り出した。私はてっきり落し物だと思い、「犬が落ちましたよ」と大声を上げて、車の後を追ったが、車の主は知らん顔で行ってしまった。それで棄て犬だと合

点したが、自分の迂闊ウカケさがおかしくなった。その犬は、その儘育って、今でも町内に住んでいる。しかし、どこかの家の飼ではない。

そうした犬どもの中にも愛想のよい犬もあり、愛想のよくない犬もある。

ある早朝、電話のベルがしきりに鳴るので急いで電話口に出てみた。無名氏からの電話で「野良犬を何とかしてほしい」と声をひそめて言う。そのままにしておくわけにもいかず、早速に駆け出して行ってみると、愛想のよい犬であった。しかし、犬であるというだけで無名氏にとっては目障りゴザリな存在であるらしい。隣れではあるが、保健所送りにしないで済ますわけにはいかぬ。町内中を追い回して、やっとつかまえてりあえず電柱に繋いだ。犬はいやがってキャンキャンと鳴くので閉口した。保健所送りにしたが、その後の運命は知らぬ。

こうした、有り難くない煩雑な俗事に日常追いかけ回されるようになったのは、三百戸の町内会長の役をおおせつかってからのことであり、早朝の電話のベルの音に目覚めることの多くなったのも、それ以来の

悲しい習わしである。

今夏、煩雑な俗事を避けて、白馬山麓に旅寝した折のことであったが、鳥の啼き声にふと目覚めて空を眺めやると晝闇の空に無数の星が散らばり、中にも一つの星が大きく金色に輝いていた。わが平常住むあたりの空の如何にも心細げな星の光とはちがっていて夢幻の境に誘われた。鳥の啼き声に目覚めたことも何か不思議な気がした。以前には、わが家の小庭にも鳥が来て、しきりに啼いていたが、光化学スモッグ警報が出るほど大気汚染がひどくなり、鳥の来ることも稀になり、鳥の啼き声の代りに人工的な物の音で目覚めることが多くなったからであろうか。自然のリズムを忘れ、人工的な生活のリズムに浸り過ぎ麻痺した心には、鳥の声で朝を迎えることが新鮮で不思議であったのであろうか。

他の無名氏から「野良犬を何とかしてほしい」との電話があったのは、その旅寝から帰宅した翌朝であったが、取り合う気持ちをすっかり失ってしまった。それで犬は相変わらず私の家の回りを三々五々自由に徘徊徘徊している。

(女子大学教授・国文学)